

# 奄美群島のコミュニティラジオ～文化装置的役割に注目して

## Community Radio as Cultural Function for the Amami Islands

金山智子

KANAYAMA Tomoko

**Abstract** The Japanese archipelago consists of 6,852 islands and about 421 are inhabited. I have studied on the relationship between the local community and community communication in small islands particularly focusing on local media since 2005.<sup>1</sup> This article as a part of ongoing research reports the meanings of community radio station for the Amami islands, which consists of five islands. Since Amami FM was opened in Amami-ohshima in 2007, three new radio stations have signed off the air in the island. Other plans to open radio broadcasting also have been preparing in Tokunoshima and Okinoerabu. Through the in-depth interviews, it has been understood that each community radio station might be a symbol of own cultural identity and play as cultural function. The aggregation of these symbols is important for the whole islands for maintaining their own culture preserved for the long period of time when being occupied and oppressed by the mainland of Japan.

**Keyword** コミュニティラジオ、奄美群島、アイデンティティ、群島ネットワーク、文化装置

### 1. 奄美群島の調査概要

#### 1.1 調査の目的

どこか土臭さの残る奄美空港からレンタカーに乗り、名瀬に向かってしばらく走るとカーラジオから奄美の島口<sup>2</sup>が流れてくる。ディ！ウェイブというラジオ放送だ。2007年、奄美初のコミュニティラジオ局、あまみ FM（ディ！ウェイブ）が開局し、あまみ FM を含む奄美大島のメディアの調査のため来島した。「シマッチュの、シマッチュによる、シマッチュのためのラジオ」を掲げ、奄美の島の人々が自らの文化の良さを認めるためのツールと位置づけたラジオ放送の面白さは格別で、以来、毎年あまみ FM を訪れるようになった。

それから数年後、電波の届かなかった西端の宇検村や最南端の瀬戸内町でもコミュニティ FM 局が開局し、あまみ FM とは少し違う島口のラジオ放送が聴けるようになった。そして昨年、奄美空港に近い龍郷町でもラジオ放送が始まり、文字通り、奄美大島のあちらこちらでラジオが聴けるようになった。

コミュニティラジオ局の開局ラッシュは、奄美大島に留まらず、徳之島や沖永良部島へ

<sup>1</sup> 2004年より、コミュニティ形成と地域コミュニケーションの関係をテーマに離島を対象として継続的な調査を行なっている、これまでに伊豆七島、父島、奄美大島、小豆島、奥尻島、隠岐ノ島、沖永良部島、宝島、徳之島、石垣島、久米島、沖縄本島、宮古島、伊良部島などでフィールド調査を実施してきた。

<sup>2</sup> しまくち、島の方言

飛び火した。非認可ではあるが、2つの島でミニ FM 局が立ち上がったのである。

あまみ FM 開局当時のフィールド調査をもとに、「あまみ FM は自らが島のアイデンティティを見出す装置であり、これまで築いた奄美の文化を土台に新たな文化を創造していくメディアである」と自身の論文で述べた。<sup>3</sup>その背景には、薩摩と琉球という2つの政治や文化圏の狭間で長く喘いできた過酷な歴史がある。

あまみ FM 開局以降、3つのコミュニティ FM 局が開局され、沖永良島と徳之島でもミニ FM 放送局が立ち上がり、3つの主要な島々でラジオ放送が始まったが、これらのコミュニティラジオ局は、あまみ FM 同様、自分たちのアイデンティティを見出すための装置なのだろうか。そして、奄美群島という集合体にとって、どのような意味をもっていくのだろうか。2010年以降、この研究課題をもとに奄美群島でのフィールド調査を続けており、本稿では奄美大島の調査について経過報告する。

## 1.2 複雑な歴史と島の文化

まず奄美群島について簡単に解説しよう。奄美群島は鹿児島市から南に380キロに位置する奄美大島、それにつづく喜界島、請島、与路島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島、そして与論島の8つの島々から成る。群島の人口は11万5千、半数が奄美大島に住む。暖かい黒潮に育まれた珊瑚礁や極彩色の魚、亜熱帯の森の植生や動物たち。天然記念物のアマミクロウサギやマングローブを知っている人も多いだろう。薩摩藩時代から生産されている甘蔗でつくる黒砂糖や黒糖焼酎、1300年以上の歴史を誇る大島紬も今なお重要な奄美のシンボルだ。

奄美群島の行政管轄は鹿児島県である。文化の始まりは6千年前に遡り、大和朝廷とも交流があった。16世紀に琉球王国の支配下となった後、薩摩の琉球侵攻により、奄美群島は薩摩の直轄地となる。薩摩の黒糖政策による過酷な労働と収奪、いわゆる黒糖地獄による飢餓、一字姓や紬着用禁止令といった差別など、奄美にとっても最も過酷な時代であった。

明治維新以降、鹿児島県となるが、県の奄美独立予算（新たな差別）により経済不況となり、蘇鉄を食すほどの飢餓に苦しめられた。太平洋戦争後は沖縄同様に米国占領下となり、本土分離によって経済的に困窮した。子どもを含めほぼ全島民による激しい奄美群島祖国復帰運動により本土返還を果たすが、復帰後は沖縄による奄美差別や本土中心主義による方言禁止といった差別をうけていく。奄美群島の歴史は、占領や支配による飢餓と差別といっても過言ではない。

奄美文化はこの悲しい歴史の中で形成された。現代では癒しといわれる「島唄」は、薩摩支配の苛政と圧迫の中から島人<sup>4</sup>の呻き声として生まれた。辛い労働、別れ、密かな恋な



<sup>3</sup> 金山智子「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達～奄美大島編」Journal of Global Media Studies 2008

<sup>4</sup> 島の人のことで、シマンチュまたはシマツチュとよぶ。

ど、歌詞に深い情が込められ、集落（しま）ごとに音階や調子が異なる。徳之島以北は五音音階の陽音階で日本民謡南限、沖永良部以南は琉球音階で琉歌北限と、南北に長い群島に文化的な境界が言語と同様に表れる。毎夏に各集落で踊られる「八月踊り」も、本来は過酷な労働の中で伝えたいことを「踊り」として体で表現するものであった。

本土と琉球との狭間に喘いだ抑圧の中で奄美独自の文化社会を築きながらも、その文化を誇り、奄美のアイデンティティをつくることさえ許されない過酷な歴史であった。そのような中で、奄美の人たちは、島外の人たちのレンズあるいは島外のメディアを通して奄美を感じることができた。近年の島唄ブームや島ブームも島外のレンズとして機能しているように、奄美のアイデンティティの模索は現在も続いている。

## 2. 奄美大島のコミュニティラジオ局

2007年5月に、奄美の人たちが自分たちの文化や情報を発信するコミュニティ FM 局、あまみ FM（ディ！ウェイブ）が奄美市（人口 45,000 人）に開局した。2010年には、宇検村（1,870）で FM うけんが、2012年には瀬戸内町（9,530）で FM セとうちが、そして、2014年に龍郷町（6,000）で FM たつごうが開局し、南北4つの市町村でコミュニティ FM 局が存在している。名瀬と宇検の間にある大和村でも、村のラジオ局開局は断念したが、2012年に中継局を設置し、あまみ FM 経由で村の地域情報を発信している。



### 2.1 あまみ FM～シマツチュのシマツチュのためのシマツチュのラジオ

あまみ FM<sup>5</sup>は、復帰 50 周年を機に島のことをもっと発信しようという動きの高まりの中から 2007 年に奄美市で開局された。当時、放送局長の麓憲吾は次のように話している。

島の人たちが島のこと知らなかったというのが一番抜けてたことで、そういった把握もせずに島のことをどんどん発信することによって、守るものと得るものとの区別がわからなくなっちゃうだろうと感じたわけです。島の人が島のことを知るところから始めたいというのが僕の大きなコンセプトだった。

あまみ FM の放送内容は他のコミュニティ FM とは一線を画す。6 時にあまみ FM ラジオ体操から始まり、区長さんのゴミ出し情報、島唄、島口、局歌と続く。ニュースを含め全て島口で読まれ、島人でも意味が分からない人も結構おり、よそ者には何を話しているのか全く分からないことのほうが多いかもしれない。島の文化を意識した番組に加え、東京で音楽関係の仕事をして U ターンした麓は、島から島の音楽を全国へ発信することにも積極的だ。元ちとせ、中孝介、カサリンチュなど島出身の著名アーティストや若いアーティストたちは今も奄美に拠点を置き、あまみ FM から発信を続ける。NPO 法人のあまみ FM の会員数は 1500 人にのぼり、島外にも多くのファンをもち、ディ！の愛称で親しまれている。

2010 年の奄美豪雨での災害放送があまみ FM の放送への意識をかえる契機となった。「地

<sup>5</sup> あまみ FM <http://www.npo-d.org/index.html>

域密着は集落の中のコミュニケーションありき」と麓は語っていたが、これは「伝える理由、守る理由、助ける構図は全てシステムではなく、コミュニケーションである」ということを、災害の復旧復興を通して痛感したことに起因する。全集落にもっと入りコミュニケーションしていかなければ分らないと自戒し、目の前の島人たちの感受性を探りながら作っていくことを重視する。

2012 年、名瀬の場末の小さな寂れた末廣市場にサテライトスタジオを開設した(写真左)。駄菓子屋兼スタジオの開け放した窓からは、魚をさばく音や駄菓子を買う子どもの賑やかな声が入ってくる。パーソナリティはバリバリの島口で、通る人たちに声をかける(写真右)。市場の声は全て放送で流れる。まさに、地域に入り、島人たちのコミュニケーションを大切にすることを具体化した放送と言える。最近では、市場に若者の店も少しずつ増え、新たなコミュニケーションが生まれている。



## 2.2 FM うけん～ずっと変わらず宇検サイズ

2010 年 1 月、島で二番目に小さい村、宇検村に FM うけん<sup>6</sup>が開局した。村役場が機材などを無償で貸与し、NPO 法人が運営にあたる公設民営型の局だ。開局当時は人口二千人の小さな村に開局したラジオ局として注目を浴びた。「宇検村だけのための放送」をモットーに、徹底して村民に向けた放送を行なう。開局して 4 年、村民の 8～9 割が聴き、7 割近くがラジオに出演しており、全村民参加を達成する勢いだ。リスナーとの完璧なコミュニケーションを大事にし、村民の情報は誹謗中傷を除いては殆どオープン、時には酔っぱらいも取材するなど、小さな村だからこそ出来る放送内容となっている。村民が多く登場する放送は、村民の共通の話題となり、地理的に離れている 14 の集落をつなぐ架け橋にもなっている。

徹底した村民向けの放送にも関わらず、FM うけんの熱烈なファンが村外や島外に存在する。瀬戸内町の住民で、町にラジオができて、FM うけんが聴ける所までわざわざ移動して聴いている人もいる。FM うけんの番組の一部は、あまみ FM の枠でも 20 分ほど放送されており、あまみ FM のサイマル放送で偶然 FM うけんの番組を聴きファンになり、東京から宇検村まで遊びにきた人もいる。こうした村外のファンの存在を喜ぶ一方で、村民のための放送という姿勢は崩さず、むしろ、どこの誰がどうしたといった井戸端会議的放送を続ける為には、面白すぎて村外に波及しないようにしたいと放送局長の渡(写真)は話す。



## 2.3 FM せとうち～宇検のような瀬戸内になりたい

奄美大島南端に位置する瀬戸内町で 2012 年に FM せとうちが開局した。公設民営型運

<sup>6</sup> FM うけん <http://fmuken763.amamin.jp/>

営から住民参加の番組制作に至るまでFMうけん方式を踏襲している。番組は全て町民が制作し、現在35組が月1本程度のペースで制作しているが、番組を作りたい住民は今も増えている。瀬戸内町は、朝崎郁恵や元ちとせなど素晴らしい唄者を輩出している地であり、集落ごとの島唄や踊りの習い手も多い。一方、ダイビングスポットも多く、島外からダイバーたちが移住しており、番組制作する住民そして内容は多様だ。FMうけん同様、あまみFMのサイマル放送を通じてFMせとうちの番組が20分ほど流れ、それを聴いた町外の瀬戸内町出身の人たちからもリクエストが寄せられる。

順調に運営されているように見えるが、役場との連携不足に悩まされる。現在、スタッフは事務局長のみで、全て一人でこなさなければならない。FMうけんの成功裏には、宇検村役場と局の密接な協働があるが、「宇検のようにやればいい」と形だけをなぞることしかせず、「補助金だけでやること、番組足りなければディ（あまみFM）流せばいい」といった態度で連携しようとしないうちの町役場に対して強い不満があり、住民参加の番組をどう増やしていくかが課題となっている。

## 2.4 FM たつごう～ハード屋さんのつくるラジオ番組

2014年3月、開局直前に龍郷町のFM たつごう<sup>7</sup>を訪問した。開局は奄美通信社長である梶山さん（写真）、いわゆるハード屋さんの念願であった。梶山さんは奄美3局の開局にハード面に関わり、龍郷特有の番組をつくりたい、面白い番組は地域でなければ作れないという強いこだわりが地元龍郷町での開局につながった。ただ、ハード屋でありソフト（番組制作）の難しさも実感しており、実際、MBC、鹿児島、あまみFMと、他局の番組を放送している時間数は最も多い。梶山が目指すのは、むしろハードのネットワーク化で、奄美群島のコミュニティラジオ局のハードを一元的に管理することを目指している。東日本大震災以降、局の機材の検査は以前よりも厳しくなり、防災体制の強化も求められている。小さな群島の小さなラジオ局だからこそ、ネットワーク化して管理することに大きなメリットがあると考ええる。

## 3. アイデンティティを守る装置

### 3.1 集落のコミュニケーションが全て

奄美大島の4つのコミュニティFM局の現状を簡単に報告した。あまみFMは奄美の中心部である名瀬地区にあり、規模、運営体制、番組制作など、他の3局とは異なる。スタッフを抱え、アーティストを含む多くのパーソナリティをもち、多様な番組を企画制作している。一方、公設民営型のFMうけんとFMせとうちは、住民たちが番組を制作し、住民たちに向けた放送を行なう。開局して日の浅いFM たつごうも住民による番組制作が中心となる。それぞれ違いはあるが、しまの人たちを中心に、しまの人たちに向けて放送している点は同じである。“しま”は、島と集落の2つの意味をもつが、奄美のコミュニティラジオ局では集落（しま）の人たちの生のコミュニケーションが基本であり、それを活かした放送をすることが全てと言っても過言ではない。あまみFMの麓が「FMうけんが理想」と度々口にするのは、集落のコミュニケーションがそっくりそのまま番組で感じとられるような濃い放送を実現しているからにほかならない。名瀬は宇検に比べれば都会であり、麓が「もっと集落に入らなければ」と話す理由はそこにある。

<sup>7</sup> FM たつごう <http://fmtatsugo.amamin.jp/>

どの局も、集落や島の外にファンをもつが、その事自体に対する局の関心は低い。むしろ、外ヘリーチが広がり、島外のファンが増えていくほど、島の人とのコミュニケーションを大切にしたいという想いと島の人と向き合っていこうとする志向は強まっていく。

「残すのは文化ではなくコミュニティの形成」とあまみ FM の麓が力を込めて話していたが、奄美のコミュニティのラジオは次世代に何かを残すべきだと真剣に模索する。サイマル放送では、島外の奄美出身者たちが放送を聴いて島に帰りたい、そういう気持ちをくすぶる放送を目指し、他方、高校卒業とともに島を離れる多くの若者にいかに島の面白さや格好よさを伝えるか、イベントや放送で工夫を重ねる。放送を通して、外にいる島人をもっと引き込んでいくことに意識を向ける。FM うけんが、外の人たちに番組があまり受けてしまうことで、宇検らしい放送ができなくなってしまうのではないかという懸念も、一つでも多くの住民の番組を増やそうとする FM せとうちの奮闘も、全てしまのコミュニティを守ろうという思いに他ならない。「他者の目という鏡を見ないと自分たちを認められない構図から脱却し、自己の目・口・耳で奄美のアイデンティティを見出すための装置である」と、あまみ FM が開局した当時のヒアリング調査をもとに結論づけたが、「アイデンティティを守る装置」という役割も担っていることがみえてきた。

### 3.2 違うということと、束ねるということ

奄美文化といっても集落ごとに島口や島唄、踊りは異なる。島口に関しては、名瀬の言葉が若者を中心に話されており、FM うけんと FM せとうちでは、名瀬の方言が島口の標準になり、宇検や瀬戸内町の島口が薄れていくことを危惧する。特に、あまみ FM が奄美の島口の標準化をもたらすのではないかという懸念から、集落の年配の人たちや島口の喋り手をもっとラジオに出演させ、宇検、瀬戸内それぞれの方言や文化を継承させていこうと取組んでいる。

これに対し、あまみ FM の麓は、「お互いが違うという土俵を一つ作ること」が大事だと話す。開局当初から奄美群島としてコミュニティラジオのネットワークの構築を描いてきた麓は、「うちの集落は違う」ということが始まりであり、違いを認めた上で束ねていくことが、結果として、アイデンティティを明確することになると考えている。FM うけんや FM せとうちの懸念とは裏腹に、あまみ FM のサイマル放送を通して、FM うけんや FM せとうちのファンができたというケースは、他と違うということを意識し、同時に放送として一つに束ねられたからこそ、違いが明確になったとみることができるだろう。

この考え方は、奄美大島の4局だけでなく、奄美大島、徳之島、沖永良部島といった奄美群島にも通用する。群島という一つの土俵で個々の島の違いを認めることは、それぞれの島のアイデンティティを明確にすることであり、さらに一つの土俵として束ねることで、沖縄や鹿児島、本土といった土俵とは違う、つまり、奄美というアイデンティティを明確にすることとなる。今回は紙面の都合で、徳之島と沖永良部島の報告はできなかったが、これからも継続的に調査をすすめ、奄美群島ネットワークとしてのコミュニティラジオについて考察をすすめたい。

あまみ FM では、2年ほど前から「放送ディ学」という番組を始めている。島の営みの文化を伝えることが目的であり、社会科、家庭科、音楽科など授業形式で地元の先生を招き、島の料理や島唄を子どもたちと一緒に習い、島について考えていく内容だ。島のものなら何でも売っていく、という姿勢ではなく、「売るものは売るけれど、守るものは守る」

という意識を島の人たちに高めてもらうための、島に島を伝える番組だと麓は説明していた。

奄美大島に複数のコミュニティラジオ局が出来たことは、島の中で違うことを互いに認識し合い、認めることを通して、それぞれのアイデンティティを明確にすることになった。外の力を借りずとも、自分たちで気づき、守っていくための装置であり、それが新しい文化やコミュニティを築く土台となるのだろう。コミュニティメディアの役割はコミュニティの形成とともに変わり、コミュニティもまた、コミュニティメディアによって守られながらその輪郭を現していく。

※本研究は科研費事業基盤研究(B)「日本型コミュニティ放送の成立条件と持続可能な運営の規定要因」の助成によって行われています。